

田中康夫と、AOR作品を聴く

『たまらなく、アーベイン』をめぐって

構成 = 野々村文宏 Photo = 小沢英男

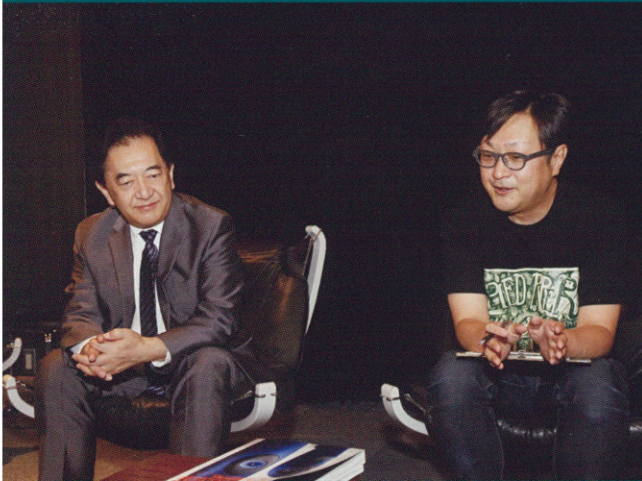


Profile

たなかやすお。1956年生。一橋大学在学中の1980年に第一作『なんとなく、クリスタル』（「もとクリ」）で文藝賞受賞。クリスタル族が流行語に。1984年、AOR（アダルト・オリエンテッド・ロック）の名盤100枚をシーンごとに解説する『たまらなく、アーベイン』を刊行。1995年の阪神・淡路大震災では50ccバイクでボランティア活動。2000年に長野県知事。その後、参議院議員、衆議院議員を歴任。2014年に『33年後のなんとなく、クリスタル』（「いまクリ」）を刊行。2015年春、一般社団法人「ワイアンドティ研究所」設立。『たまらなく、アーベイン』の復刻版も刊行。

tanaka@nippon-dream.com

<http://www.nippon-dream.com/>



田中さんは、この夏、横浜赤レンガ倉庫で開催された「70'sレボリューションYOKOHAMA」で『なんとなく、クリスタル』、『たまたなく、アーベイン』その誕生日夜としてのAORの題で8月22日のトークショーに出演して青山バイドバイパーハウスの思い出を語った。その展覧会の記念のバイドバイパーハウスTシャツを着ている野々村さん



『たまたなく、アーベイン』
(河出書房新社) ¥2,600

AORの100枚の名盤を、朝、午後、夕方、夜のシーンに分けてエッセイのかたちで80年代ライフスタイルとして描く。ジャズ・ミュージシャン/文筆家の菊地成孔が絶賛。古書市場で高値をつける「伝説の書」だったが、2015年5月に復刻された



『33年後のなんとなく、クリスタル』
(河出書房新社) ¥1,600

『なんとなく、クリスタル』から33年後、50代に入った主人公らが織りなす物語。小説の形式のなかに現在の音楽とメディアに関する言及やAORに関する言及なども埋め込まれている

田中康夫さんの『たまたなく、アーベイン』という本。女の子とふたりでドライブしながら、東京の風景やおいしいレストランや流行の服、時事の話題などを描いていく。アダルト・オリエンテッド・ロック (AOR) のレコードガイドをエッセイのかたちで書いた独創的な文体だった。ちょうど時代はアナログレコードからCDへの転換期でもあった。その本が30年ぶりに復刻されたことを記念して、ご本人をお招きして、オーディオ聴き比べをいただいた。お話しは、音楽とのつき合い方からメディアのあり方などにも広がり……。

田中さんは1970年代の大学生の時分、現在は廃番となっているテクニクスのSL-1200というDJ御用達のレコードプレーヤーを買われたのですよね。

田中 (以下、名称略) 「生協のローンでね。ティアックのダブルカセットデッキでダビングしていました。大学を卒業してからはナカミチを2台。テクニクスSL-1200MK2を2台、ティアックのミキサーM-30も買いました」

1984年当時、まだ評価も定まっていない、アダルト・オリエンテッド・ロック (以下AOR) のレコードを100枚集めて、しかもライフスタイル・エッセイとしての『たまたなく、アーベイン』。たいへん驚きました。

「もともと、僕は、ロックのライナーノーツに音楽評論家を書く、「かく聴くべし」とか「かく語るべし」が苦手だったんです。かぎかつこ付の『イデオロギー』というか、大きな声で『正義』を語る人には嘘があるというか表裏があると、小さい頃から思っていた」

それは今も変わらない田中さんの原点ですよね。でも、どうやってAORに詳しくなっていったのですか？

「大学への入学が1976年。前年の暮れに南青山の当時はまだ骨董通りと呼ばれていなかった通りにバイドバイパーハウスができたの。音楽好きのサロンにもなっていた輸入レコード屋さん。家庭教師のお金で盤を買集めた。後に新宿のシスコや六本木のウィナーズでも買うようになる。輸入盤は透明なヴィニールでシールドされていたから、すべて試聴できるわけじゃないので、新人のアルバムと出会った時は『ビン詰めの情報』と『カン詰めの情報』を駆使しないと選べない。ジャケット裏にクレジットされたプロデューサーや参加ミュージシャンは『ビン詰めの情報』。でも、それぞれがどういったアーティストを手掛けていたかは頭の中の『カン詰めの情報』から引き出さないとね。ネットで簡単に試聴可能な今は違って、そうした照らし合わせの訓練を与えてくれたのがレコードの世界だね」



The RAH Band / Going Up より
"Perfumed Garden"

1981年

ベテラン・キーボード奏者/アレンジャーのリチャード・アンソニー・ヒューソンの1人プロジェクト。現在では、初期エレクトロの傑作として砂原良徳がカバーしているほど。Fm yokohamaの新番組、田中康夫『たまらなく、AOR』のオープニング曲に。番組は10月から毎週(火)深夜24:00~24:30。
<http://www.nippon-dream.com/>



テクニクス SL-1200 とオラクル・テلفィ。フォノイコライザーには PS オーディオの NuWave Phono Converter。A/D コンバーターを内蔵していて、レコード音源をハイレゾ・デジタルファイルに変換できる
PS オーディオ 〓 完美電気サポートセンター ☎ 050(3388)6838

田中康夫と、AOR作品を聴く 『たまらなく、アーベイン』をめぐって

きょうは、田中さんが当時お使いになっていたテクニクス SL-1200 を編集長の私物で持ち込みました。アナログレコード再生では、カートリッジを替えるとももちろん音が変わりますが、プレーヤーを替えても音が変わりません。さらに言えばアームを替えても変わります。

「そういう芸当は CD じゃできないわけでしょ？」

CD プレーヤーは筐体内部でディスクを高速回転させていますから、ふつう内部の光学式ピックアップをユーザーが替えることはできないんですね。いっぽう、レコード盤の回転は人間の眼に見えるようなスピードですし、ユーザーの手でパーツが交換可能です。

「なるほど。洪水を防げないダムも原発も『科学を信じて技術を疑わず』の悲喜劇だよな。他方でレコード盤とプレーヤーは、『科学を用いて技術を越える』の喜びの世界。まさに人間とは考える輩であるという実証なんだ。図表や数式で全て説明可能だと考える「形式知」という頭でっかちな知識でなく、言葉では上手く言い表せないけど確かに感じ取れる「暗黙知」の世界だよ、レコードは」

では、最初に、ヘッドシェル付で1万円とちょっとのオーディオテクニカの新製品 AT95E/HSB で試聴してみましょう。試聴曲を何にしますか？

「The RAH Band の "Perfumed Garden" にしようかな。

10月からFm yokohamaで始まる火曜深夜24時の僕が選曲とお喋りを担当する音楽番組『たまらなく、AOR』のオープニングでも流れる曲です」

それでは再生します。AT95E/HSBは普及版らしい、実に安定した再生をするカートリッジだと思います。ここでワンランク上げて、デノンのDL-103に替えてみましょう。ずーっと長く日本の放送局で使われてきた定番のMC型カートリッジです。

「高域の伸びが良くなったような気がするね」

それと、さっきより細かいニュアンスが出てきて音の分離が良くなりましたね。

最初のテクニカ AT95E/HSB が VM (MM) 型のカートリッジで、次の DL-103 は MC 型、駆動系の仕組みに違いがあります。では今度は、デノンと同じ MC 型のオルトフォン MC-Q20 に替えてみました。

「クリアーなカットだけれども、いっぽうで、こう、押し出しが少し弱くなったような気がするなあ」

的確な評です。美音で、ヴォーカルや楽器の細かいニュアンスが出てくるようになりましたが、DL-103 に比べると描写の線はたしかにやや細くなりました。

カートリッジを替えてもらっているうちに、少しお話の続きを。今こうやってスピーカーを通じて聴いている

DOUBLE FUN ROBERT PALMER



Robert Palmer / Double Fun より

“Every Kind of People”

1978年

「色男として知られる ロバート・パーマーのこのアルバムは、78年もの少し古いですが、ジャケットも中身も、彼のアルバムの中では一番。レーベルがアイランドのせいかな、多少、カリブ海音楽のインフルエンスも感じられて、ムシヤクシャ気分も吹き飛びそうです」
復刻版『たまたまなく、アーペイン』119ページより



「ええっとねえ、じゃあ、次はこれ」

からコミュニケーションが成り立っているわけで、それがヘッドフォンやイヤフォンになると音楽が個人のものになってしまいますよね？

「うんうん。昨年末に上梓した小説『33年後のなんとなく、クリスタル』の中でも登場人物のヤスオが言っているよ。『成熟した大人の社会に相応しい豊かな“お喋り”を引き出してくれる存在・人と人とのコミュニケーションの触媒としての音楽は、逆にコミュニケーションを遮断するような装置へと、いつの間にか変容してしまったのかも知れない』とね。カセットテープのウォークマンが出たのは1979年。当時はウォークマンをして六本木や渋谷を歩くと皆が振り返るから、ちょっぴり自慢だった。でも、それは他者との遮断ではなかった。自分が大好きな音楽を他の人とも分かち合いたいという気分。だって当時はベストカセットを自分で編集して恋人や友人に聴いてもらっていた時代。今はそうじゃないからね。音楽が会話の媒介になるという点から言えば、浅田彰さんから教えて貰ったんだけど、哲学者のカントは『社交主義的公共性』と提唱しているんだね。つまり、仕事を終えて家族や隣人や友人と飲み食いしながら社会や政治や文化のあり方を語り合うプライベートな時空にこそ、実は最もパブリックな意識があるんだと。でも今は、

公共の電車の車内で正面に座った人をじろじろ見ているとストーカーと思われかねないから顔を合わせないようにスマホをいじっている。隣り合って座っているカップルもそれぞれ別の音楽をイヤフォンで聴いている」

本当にそうですね。いま公共空間には、スマホをふくめて、個的ではあるが密閉された空間がそこにいる人数分あるだけのような気がします。

さて、今度はオーディオテクニカのVM (MM) 型の最高級機種、AT150Saに替えてみました。

「これは、奥行きとは違う、広がりを感じる。そして見晴らしの良い草原なんだけれど、ただ広がっているだけじゃあないね。ちゃあんと詰まった風の質感を感じさせるというか」

流石ですね。テクニカ AT150Sa は VM 型なのに MC 並みに音場が広いんですよ。しかも適度な力感もある。約9万円の高級なVM (MM) には、これでしか出ないような存在理由を持った音があると思います。

では、いよいよ40万円近い超高級カートリッジに替えてみましょうか。ミュートックのRM-KANDAです。

「“Perfumed Garden” は、歌手の女性の声質の問題もあるから、違いがわかりづらいなあ。ロバート・パーマーのアルバム『Double Fun』から“Every kind of People”にし



オルトフォン MC-Q20 (¥71,000) は、高純度銅コイルにアルミ製カンチレバー、無垢ダイヤのファインライン針。5万円から10万円までのクラスのMC型カートリッジの中では、抜群の空間表現力と高分解能をほこる人気機種だ。同社 MC シリーズ伝統の美音が魅力
 ◎ オルトフォンジャパン 株 ☎ 03 (3818) 5243。

オーディオテクニカが VM 型 (MM 型) で本気を出すと、こうなる。この11月発売の AT150Sa (¥91,000) は、ラインコンタクトのシバタ針を採用。同社100系の堅牢なメタルダイキャストボディで、低域の不要振動を大幅にカットしている。MM 型とは信じがたい音場の広さ
 ◎ オーディオテクニカお客様相談窓口 ☎ 0120-773-417

現代の高性能カートリッジの代表のひとつ、ミュテックの RM-KANDA (¥380,000)。ボディにブラックロジウムメッキ、ヨークレスでリングマグネットにはネオジュウムを使用し、独自のコア材を配す。カートリッジ制作ひとつ筋50年・神田榮治氏の「神の手」による手作りで、別次元の再生を奏でる
 ◎ 株カジハラ・ラボ ☎ 03 (6279) 6311

田中康夫と、AOR作品を聴く 『たまらなく、アーベイン』をめぐる

ましようか」

私には、ベースの音が今まででいちばん良かったですね。低域が締まった。あと音場に奥行が出てきましたね。ハイエンドオーディオに共通する音場です。

「ちょっとテクニカの最高級 VM 型に戻して聴いてみようか。テクニカのほうが、ロバート・パーマーの声やドラムの感じが、一般には受けるような気がする、とくに押し出しが。逆に、ミュテックは、オルトフォンの時に感じた、よく言えば繊細なんだけれど、ちょっと、無機質というのと違う意味で、前の方に出てこない物足りなさがあるような気がする。僕のような素人にはこちらが心地良し、またロバート・パーマーの声質には合っている感じがするんだけど」

このミュテックは精密機器のようなカートリッジで、分解能とかいうか、楽音の分析力が高いのですね。だから、逆に言えば音楽のアラの部分も見せちゃう。あとはロバート・パーマーのこのアルバムが作られた、ポップ音楽における1978年という時代との相性もあるかもしれないですね。2015年に発売された現代の最先端の高性能カートリッジだと、1970年代のポップ音楽のある種のおおらかさとは違う方向にオーディオのベクトルが向いているのではないかと。

「成る程ね。先程の『科学を信じて技術を疑わず』は、端的に言ったら市場原理主義。市場(しじょう)と市場(いちば)は違うでしょ。市場(いちば)は、全体で採算が取れていれば、ひとり暮らしの馴染みの老人が魚屋さんに買いに来たら、この切り身は小ぶりだから30円負けとくよ、というものです。他方で市場(しじょう)は全部の損益分岐をこと細かに計算している。でも、そこにはデータの打ち間違いもあるかもしれない。プログラムにバグがあるかもしれない。じゃあ、ロバート・パーマーとはぜんぜん逆の、人工美の極致とも言える、クラウス・ノミの“Cold Song”をかけてみてください」

クラウス・ノミ。3曲目の選曲は意外でした。

「これは彼の声質というよりも、彼の存在が極めて人工的に作られているので、このカートリッジには合う、という気もしますね。彼はもともとリアルではない作られたキャラクターで、しかしそういうキャラクターを作っている根底に、彼自身が生きている、というリアルがあって、彼自身がどう見てほしかったのか、見られたかったのか、しかしそれもまた、レコード盤の溝に刻まれて消費されていくものなんだけれども、という」

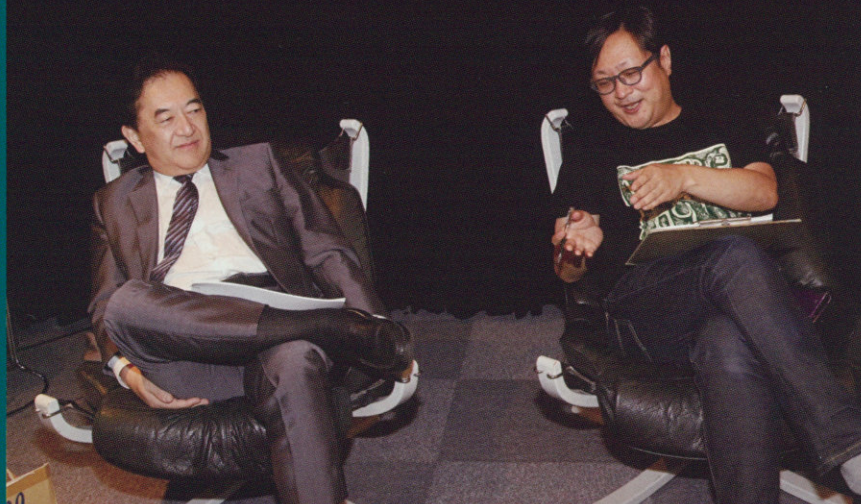
ああ、これは、たぶん古い教会で歌を録音していますね。自然のエコーでしかも天井の高さ方向まで感じさせ



Klaus Nomi / Klaus Nomi より
"cold Song"

1981年

1972年にベルリンからニューヨークに移住し、1979年からデヴィッド・ボウイのバックコーラスに参加するなどして注目されたニューヨーク地下文化の怪人。奇抜なファッションとメイクとパフォーマンスでオペラのアリアを歌う。1stアルバムは1981年。1983年にエイズで死去。享年39歳



「アームは一体型のほうが音質には有利なのですが、こう……」
「ふむふむ」

る。ただしバックの楽器はチェンバロを模しているけれどチープなシンセサイザーで、両者の質感の違いを見事に描き分けています。しかし、こんなに高解像度なクラス・ノミ、自分は初めて聴きました(笑)。

ちょっと気になるのは、プレーヤーとカートリッジとの相性です。もう廃番だけれどもテクニクスのSL-1200は業務用の頑丈な造り、いっぽうミュテックは精密計測機器のような繊細な造りです。

ここで、いきなり、カナダのオラクル社のデルフィという超高級プレーヤーに替えてみましょう。ただし、アームが一体型アームと言って、カートリッジのかけ替えに時間がとてもかかるので、カートリッジは最初に取り付けていたスイスのベンツ・マイクロ社のLP-5で聴いてみます。これが最高額、約60万円です。

もう一度、2曲目に選んだロバート・パーマーを聴いてみましょうか。

「なるほど。たしかにこれだと高度な再生のうちに、なめらかで、感情を感じさせる演奏だと聴こえるね」

きょうは時間があまりないのでミュテックにはかけ替えませんが、おそらくはミュテックも、オラクルのデルフィ・クラスのプレーヤーに取り付けたらさらに良い印象を出すかと予想します。車のパーツでも、ワインと

料理の組み合わせでも、組み合わせるには釣り合いというものがありますよね。

「そうだね。逆に言えば、(既に廃番の)テクニクスSL-1200とテクニカAT150Saは、ヴァリュー・フォー・マネー的な組み合わせだったのかもしれないね」

さて、時間もそろそろです。田中さんにきょうの試聴をまとめてもらいましょう。

「僕の場合、決して懐古趣味なわけではなく、皆さんも多分そうだと思うけど、レコードに針を下ろすことの確かさと喜びというのかな。それは自動車についても同じで、オートマ車ではなくギアシフト車だったし、メルセデス・ベンツは苦手ですね。運転が上手でない人でもカーブを回れてしまうので、自分が上手だと錯覚してしまうベンツには車の楽しみが感じられないでしょ。その速度で、貴方の力量で大丈夫ですか、とドライバーに伝えつつ、それでもカーブに突入するなら最大限はやりますけど、あなた自身の判断と責任ですよ、という車の方が好きなんです。クリエイションを放棄するのが嫌なのかもね。だから、レコードからカセットテープに音楽を落とす、ミキサーでそれをミキシングする、カットアウトとカットインじゃなくてフェイドアウトとフェイドインをやる、とか、そのとき失敗するかもしれない、けれども失



マイケル・ジャクソンのピクチャー・レコードもお持ちいただいた。田中さんは1988年にマイケル・ジャクソン自伝『ムーンウォーク』を翻訳してCBSソニー出版から出版している（現在、河出書房新社から復刻）。『翻訳・田中康夫とクレジットされていたけでしたから、私を毛嫌いしていた評論家に、『同姓同名の人間が大変にこなれた訳をしている』と書かれたよ（爆）』



カナダ・オラクル社の最高級プレーヤー、デルフィ。30年以上のロングランを続けるなかで改良、現在はMkVI Gen-2（¥1,850,000 / SMEアーム付）となっている。不要振動を徹底して排した、なめらかな音の特徴。写真のカートリッジは別売。今回の試聴にはペンツ・マイクロ社の最高級モデルLP-S（¥600,000）を使った
 ◎（株）ユキム ☎ 03 (5743) 6202

田中康夫と、AOR作品を聴く 『たまらなく、アーベイン』をめぐる

敗したらまたやり直せばいいや、っていうのが好きなんです。女のコと車に乗っていて、あ、こういうシーンにこの曲の選択は違ったな、と思ったときに、カセットだと早送りしてもなかなか頭出しがうまく行かない。でも、それも学習なんだね。CDだと、曲の頭をかけて、雰囲気が違うな、と思ったら直ぐに他の曲を再生できちゃう。だけど、トライアル&エラーこそが人間の営みのはずだと思わないかい。

中学2年の時に親が最初にくれたモジュラーステレオはプレーヤー部分がオートマチックだった。でも、なにか違うなあと感じて、中3になると自分でレコードに針を落とすようになったんです。

僕の処女作『もとクリ』を大変に評価して下さった文藝評論家の江藤淳さんは、駄目な作品を論評するときに、phony（にせの、まがいもの）という単語を使ったんです。実は僕は、この言葉はphone（聴こえ）と同じ語源だと思っていて、たとえば電話を通じて誰かの声が聞こえてくる。電子工学科の学生は、こういう具合に内部では変換されて、と数式を使って説明してくれるかもしれない。でも、仮に説明できたとして、それがなぜ人間の耳に聴こえてくるのか、最後は説明がつかない。phoneって、そういうもの。リアルではない。でも、リアルじゃない

から使わないってわけもなく、だから『科学を用いて技術を越える』意識が大事だと思うよ。それは、洞察力と言ってもいいし、古い言葉で言えば『行間を読む』ってこと。その意識を持ち合わせずに『リテラシー』とやらを磨こうとしても、木を見て森を見ずどころか葉を見て枝すら見えずな展開になってしまう。文化とか伝統って数字には換算できないもの。アナログレコードに回歸している人たちは、そのことを感性でなく「勘性」というのかな、暗黙知で感じていて、だから戻ってきていると思うんだよね。僕が28歳だった1984年に、朝、午後、夕方、夜と4つの時間帯に100枚のアルバムを選んで、100個のシーンの物語を描いたのが、今春に復刻した『たまらなく、アーベイン』です。

「ストーリーやメッセージを持たない“気分の音楽”は、ドラマのないのがドラマとなってしまった僕たちの生活、そのものです」と当時、述べていた僕も59歳。でもね、再びレコードに針を落とす営為こそ、セピア色になりかけていた私たちの記憶のアルバムに、ささやかだけど、たしかな勇気と希望の息吹を与えてくれるのだと実感しますね」